第 39 回中日理論言語学研究会
2014 年 10 月 5 日（同志社大学大阪サテライト・オフィス）

「可能形+テイル」構文の統語と解釈

竹沢幸一（筑波大学）

1. はじめに

○ 状態動詞は継続相マーカーのテイル[1]と共起しない（金田一 1950，他）。

(1) a. 机の上に書類がある/*あっている
b. 太郎は妹がいる/*いている[2]
c. 太郎はお金がたくさん要る/*要っている

○ 可能動詞(「できる」，「V-(rar)e-ru」)もテイルと共起しない。

(2) a. 太郎は数学がよくできる/*できている
b. 花子はおいしい料理が作れる/*作れている

○ 可能動詞にテイルが後続する例が存在する。
（寺村 1982，井島 1991，島岡 1995，他）

(3) a. うちの子が泳げている (oyog-e-te-i-ru)
b. この論文はよく書けている (kak-e-te-i-ru)

○ 本論文の目的
本来は許容されないとされる「可能形+テイル」という述語形式を持つ構文の文法的特徴について，特に動詞の語彙的アスペクトと文法的アスペクトの関係に焦点を当てながら考察を行う。

- 可能形+テイルという述語形式を持つ文は，進行相解釈を持つタイプと結果状態相の解釈を持つタイプの２つに分類されることを示す。
- そうした２つのタイプの解釈がどのような構造的メカニズムによって導出されるかを検討する。

2. 基本的事実観察：２種類の「可能形+テイル」

(4) タイプ１
a. 今日はフォワードの選手がよく動けている
b. ほら見て，こどもでも上手に操作できているよ
c. あの役者さん，今度は間違えずに演技できている
d. 君はさっきうまく台詞を言えていたのに

(5) タイプ２
a. そのぞうきんはきれいに縫えている
b. この帯は上手に結べている
c. この英文書類はミスなく翻訳できている
d. この煮物はおいしく味付けできている

---

[1] 形態論的には，テイルは動詞の分詞形（テ形）にコピュラの現在形が後続したものであるが，ここではそうした形態上の成り立ちにはこだわらず，慣例に従ってテイル形と呼ぶことにする。テ形の形態統語的分析については内丸(2006)参照。

[2] 関西方言では「いる」はテイル形と共起可能である。

○　前提：可能動詞の形態

- 一段動詞(母音動詞)
  受動形と形態的に同一の形 V-rare-te-i-ru をとるので，形態上の特徴のみで両者を区別することはできない。
- 五段動詞(子音動詞)
  可能形 V-e-te-i-ru は受動形 V-are-te-i-ru と異なる形態をとり，両者は形態的な基準に基づいて区別できる。
- サ変動詞
  可能形にはサ変動詞「する」の補充形(suppletive form)である「できる」という不規則形態が用いられる。

➔可能形以外(受動形)の可能性を排除するため，形態だけで判別可能な五段動詞「V-e-ru」およびサ変動詞可能形「できる」を含んだ例文を用いる。[3]

○　タイプ 1 とタイプ 2 の違い

- (3a)「うちの子が泳げている」では，現在時において，主語「うちの子ども」が有する「泳げる」という内的能力が，実際の「泳ぐ」という行為として実行されつつあるという動作継続の状況を表している。
- (3b)「この論文はよく書けている」では，誰かの「書く」という活動の結果として，いい論文ができあがり，その結果状態によって「この論文」の質の良さを表した文である。

○　可能動詞+テイルのタイプ 1 とタイプ 2 の違い

A)　アスペクト

- タイプ 1：「動作の継続」(進行相解釈)
- タイプ 2：「結果状態の継続」(結果相解釈)

B)　叙述様式

- タイプ 1：主語名詞句が内的に所有する能力がある時点において(現在形であれば発話時において，過去形であれば過去時において)一時的に目に見える形で発現されている最中であることを描写している事象叙述文
- タイプ 2：主題のハによってマークされた主動詞の意味上の目的語である名詞句 (patient)が，動詞が表す行為によって引き起こされた結果状態に基づいて特徴づけを与えられたある種の属性叙述文

3.　タイプ 1 ：進行相解釈の可能動詞+テイル

○　問題：可能動詞が状態述語に属するのであるなら，それにテイルが後続するのはそもそも不可能なはずである。では，なぜタイプ 1 ではそうした連鎖が可能となっているのか？

[3]　「ら抜き」は可能形でしか現れず，受動形では起こらないので，「ら抜き」形態を用いれば一段動詞でも可能形態を受動形態から区別して扱うことも原理的に可能ではあるが，「ら抜き」は，動詞ごとによって，また人によって許容度がかなりの幅で異なるため，ここではそうしたデータを用いることはしない。

○　状態動詞判別の基準＝単純現在形（ル形）で現在の状況を表すという特徴

(6)　a. うちの子は泳げる
　　b. あの選手はよく動ける
　　c. 君はうまく台詞を言える
　　d. あの役者さんは間違えずに演技できる
　　e. こどもでも上手に操作できる

○　状態述語への文法的アスペクトの付加：英語の進行形(progressive)

(7)　a. John is kind/polite/rude
　　b. John is being kind/polite/rude
　　(Vendler (1967)，Lakoff (1970)，Dowty (1979) 等)

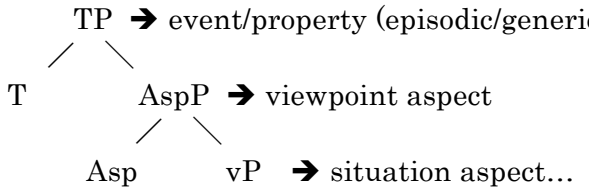
○　「強制」(coercion)によるタイプ・シフト(type shift)

(8)　a. 強制とは：意味的な衝突を回避するために引き起こされる
　　統語 的にも形態的にも非可視の構文的再解釈メカニズム
　　b. 強制の種類
　　• nominal classes (Talmy (1988))　（mass→count）
　　• verbal aspect (Pustejovsky (1991), Verkuyl (1993), De Swart (1998), Arche (2014), Dölling (2014))

○　強制によるアスペクト・タイプのシフト

(9)　２種類のアスペクト
　• Viewpoint aspect (outer aspect/grammatical aspect)
　　= Perfective/imperfective/progressive
　• Situation aspect (aktionsart/inner aspect/lexical aspect)
　　=state/activity/accomplishment/achievement

(10)



○　進行形： state→activity

(11)　[PRES [PROG [# [$_{[+stative]}$ John is kind]]]]
　　↓
　　[+dynamic]

○　日本語タイプ１可能文のアスペクトシフト

(12)　a. うちの子は泳げる
　　b. うちの子が泳げている
　　• (12a)は主語「うちの子」が泳ぎの能力を所有していることを表す状態文であり，単純現在形の場合は主語が主題マーカーのハを伴って現れ，その属性を表している。
　　• (12b)は状態述語によって表された主語の特性が実際に行為として具現化された，主語による一時的活動を表した事象文

○　英語状態述語進行形と日本語可能動詞テイル形の並行性
英語の状態述語の進行形も，その状態述語が単純現在形で表す個人の特性が一時的に目に見える活動として具現化されたことを表しているのと同じように，可能動詞のテイル形も能力の所有という特性が実際の活動として具現化したことを表していると捉えることができる。

○　「数学」vs.「計算」
(13)　a. 太郎は数学がよくできる/*できている
　　b. 太郎は計算がよくできる/できている
(14)　a.*?太郎はどんどん数学ができる
　　b. 太郎はどんどん計算ができる
　　cf.　数学*(を)する　vs.　計算(を)する

○　タ形：能力可能 vs. 実現可能
(15)　a. ペンギンが(は)空を飛べる　(能力)　主語裸名詞句　*存在・総称[4]
　　b. ペンギンが(は)空を飛べた　(能力＆実現)　主語裸名詞句　存在・総称
　　cf. ペンギンが空を飛べている　(実現)　主語裸名詞句　存在・*総称
　　➔「タ」によるタイプ・シフト　(state→achievement)

4.　タイプ２：結果相解釈の可能動詞+テイル

○　タイプ２の特徴＝テイルの結果状態の解釈
(3)　b. この論文はよく<u>書けている</u>
(5)　a. そのぞうきんはきれいに<u>縫えている</u>
　　b. この帯は上手に<u>結べている</u>
　　c. この英文書類はうまく<u>作成できている</u>
　　d. この煮物はおいしく<u>味付けできている</u>

○　問題：なぜタイプ２がタイプ１とは異なり，結果状態解釈を持つのか？

○　タイプ１とタイプ２の統語的違い
- タイプ１：基体動詞の外項がそのまま可能構文の主語として保持されて出現
　　➔「能力所有者/経験者」項を主語としてとるコントロール構造を持つ。

(16)　[Possessor/Experiencer$_i$　[PRO$_i$　V]-e-ru]

- タイプ ２：基体動詞の外項は表面上現れず，直接内項のみが表面上の唯一の項となっている。

(17)　b. *太郎(に)はこの論文がよく<u>書けている</u>（cf.(3)）
(18)　a. *花子(に)はそのぞうきんがきれいに<u>縫えている</u>（cf. (5)）
　　b. *花子(に)はこの帯が上手に<u>結べている</u>
　　c. *太郎(に)はこの英文書類がうまく<u>作成できている</u>
　　d. *花子(に)はこの煮物がおいしく<u>味付けできている</u>

[4] 裸名詞句の解釈については，鈴木彩香(2013)参照。

➔ 可能形態素「-e-ru/できる」:「能力所有者」項を外項として持つ状態性の可能構文ではなく，一種の自動詞化接辞として機能
➔ 自動詞化辞「-e-ru/できる」の付加によって，基体動詞の外項が抑制されて統語構造には投射されず，また本来，内項に与えられるはずの他動詞の対格の付与が阻止されるため，内項が主語位置に繰り上がった非対格構造を持つ

(19) [TP この論文が [VP ~~この論文~~ kak-e-te-i]-ru]
↑ _____ |

○ 自動詞化の証拠：自他交替のペアにおけるテイルの解釈の違い[5]

(20) a. 太郎が木を倒している (進行相解釈)
b. 木が倒れている (結果相解釈)
(21) a. 太郎が塀を壊している
b. 塀が壊れている
(22) a. 花子がポスターをはがしている
b. ポスターがはがれている

○ タイプ 2：同様の解釈の対立

(23) a. 太郎が論文を書いている (進行相解釈)
b. 論文が書けている (結果相解釈)
(24) a. 花子がぞうきんを縫っている
b. ぞうきんが縫えている
(25) a. 花子が帯を結んでいる
b. 帯が結べている
(26) a. 太郎が英文書類を作成している
b. 英文書類が作成できている
(27) a. 花子が煮物を味付けしている
b. 煮物が味付けできている

○ まとめ：タイプ 2 可能形態素「-e-ru/できる」
- 外項を抑制し対格付与を阻止する自動詞化接辞
  →したがってそれに後続するテイルは結果相解釈を持つ。

5. タイプ 2 のさらなる特徴：脱使役化

○ 問題

(23-27)の「書く」「縫う」「結ぶ」「作成する」「味付けする」は一般的に無対他動詞とされている。
→では，タイプ 2 の可能接辞による自動詞化とこれまで一般的に自他交替と考えられてきた現象との関係はどうなっているのか？

[5] テイルの解釈については，金田一をはじめ膨大な研究があるが，多くの研究は解釈の違いに基づく単なる動詞分類にとどまっている。竹沢(1991)では統語的な観点から「束縛」(binding)のメカニズムを用いてどのように進行相と結果相の対立が生じるかを分析している。

○　二つの自動詞化プロセス：「脱使役化」と「反使役化」（影山(1996, 2000)）

(28)　a. 脱使役化(anticausativization)：

［x → φ CAUSE［y BECOME［y BE AT z]]］

使役者 x と変化対象 y が別個の要素であること，つまり対象が変化を受ける際に自らの内的な特性によるのではなく，他の使役者による外からの力の行使が求められる

b. 反使役化 (decausativazation)：

［x＝y CAUSE［y BECOME［y BE AT z ］］］

使役者xと変化対象yが同一であること，つまり自らが自身を再帰的に変化させる「自発性」あるいは「内的使役性」（Levin and Rappaport Hovav 1995）を有する

○　可能形態「e-ru/できる」＝　脱使役化接辞

○　自他交替の証拠：影響動詞 vs. 非影響動詞

(29)　影響動詞

a. その線は真っ直ぐ引けている (hik-e-ru)
b. その模型はよく作れている (tukur-e-ru)
c. この彫刻は上手に彫れている (hor-e-ru)
d. この壁はムラなく塗れている (nur-e-ru)
e. この包帯は上手に巻けている (nak-e-ru)
f. この着物はきれいにたためている (tatam-e-ru)
g. このポスターはきれいに印刷できている
h. この車はよく整備できている
i. この野菜は細かくカットできている
j. 彼女の髪型はきちんとセットできている

(30)　非影響動詞

a. *この模型はよく使えている (tuka(w)-e-ru)
b. *このガムはよくかめている (kam-e-ru)
c. *この金属の表面はよくたたけている (tatak-e-ru)
d. *この本はよく読めている (yom-e-ru)
e. *このジュースはおいしく飲めている (nom-e-ru)
f. *この会議室はよく使用できている
g. *このボールはよくキックできている
h. *そのドアは優しくノックできている
i. *このマウスは規則正しくクリックできている

➔ 自動詞化が関与
➔ 加工・生産動詞

○　脱使役化の証拠：-ar 脱使役化の動作主性

(31)　a. They planted a cherry tree in the park
b.*A cherry tree planted in the park

(32)　a. They packed the books in the box
b.*The books packed in the box

(33)　a. They saved the boy
b.*The boy saved.

(34) a. They collected a sufficient amount of money
b.*A sufficient amount of money collected

(35) a. 彼らが木を植えた
b. 木が植わった

(36) a. 彼らが本を箱に詰めた
b. 本が箱に詰まった

(37) a. 彼らが少年を助けた
b.少年が助かった

(38) a.彼らが十分な金額を集めた
b. 十分な金額が集まった

6. まとめと今後の課題

○ 2種類の「可能形＋テイル」構文

a. 状態性可能動詞(能力可能)＋テイル ＝ 進行相解釈
「強制」によってstate→activityにタイプシフト

b. 脱使役化接辞としての可能形+テイル ＝ 結果相

○ 今後の課題

- 受動的可能文 (寺村 (1982))

(39) a. この水は 飲める(*飲めている)
b. このキノコは 食べられる(*食べられている)
cf. この論文はよく書けている（*よく書ける）

- 統語的分析
- アスペクト「テイル」の構造的分析

【参照文献】

井島正博 (1991)「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』pp. 149-189.　くろしお出版 .

内丸裕佳子（2006)「動詞のテ形を伴う節の統語構造について－付加構造と等位構造との対立を中心に－」『日本語の研究』2－1（『国語学』通巻 224 号）: pp. 1－15.

影山太郎 (1996) 『動詞意味論』大修館書店.

影山太郎(2000)「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠夫・須賀一好編『日英語の自他の交替』pp.33-70. ひつじ書房.

金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』第 15 号[金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞の アスペクト』むぎ書房, pp. 5-26 に再録]

島岡紀子 (1995)「日本語の可能表現のアスペクト—「可能＋テイル」をめぐって」筑波大学文芸・言語研究科，中間評価(修士)論文

鈴木彩香 (2013) 「述語の解釈から見た名詞句の解釈に関する統語論的研究」筑波大学人文・社会科学研究科，中間評価(修士)論文

竹沢幸一 (1991)「受動文，能格文，分離不可能所有構文と「ている」の解釈」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』pp. 59-81. くろしお出版.

竹沢幸一 (1998)「格の役割と構造」『日英語比較選書 9　格と語順と統語構造』竹沢幸一・John Whitman.　研究社.

竹沢幸一 (2002)「日本語の状態記述二次述部と統語範疇」*KLS* 22. pp.257-267. 関西言語学会.

寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味１』くろしお出版.

Arche, María J. (2014) The construction of viewpoint aspect: the imperfective revisited. *Natural Language & Linguistic Theory* 32- 3, 791-831.

De Swart, Henriette (1998) “Aspect Shift and Coercion.” *Natural Language and Linguistic Theory* 16-2: 347-85.

Dölling, Johannes. (2014) Aspectual coercion and eventuality structure. In Klaus Robering (ed.) *Events, Arguments, and Aspect. Amsterdam*; John Benjamins, 189-226.

Dowty, David (1979) *Word Meaning in Montague Grammar.* Dordrecht: Reidel.

Jackendoff, Ray (1997). *The Architecture of the Language Faculty*. Cambridge, MA: MIT Press.

Lakoff, George (1970) *Irregularity in Syntax*. New York: Holt, Reinhart and Winston.

Levin, Beth. and Malka Rappaport Hovav. 1989. An approach to unaccusative mismatches. In *Proceedings of NELS 19.* UMASS, Amherst: GLSA. 314-328.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav 1995. *Unaccusativity*. Cambridge, MA: MIT Press.

Matsumoto Yo (2000) Causative alternation: A closer look. *English Linguistics* 17-1. 160-192.

Pustejovsky, James (1991) *Generative Lexicon*. Cambridge ,MA: MIT Press.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.

Verkuyl, Henk J. (1993) *A Theory of Aspectuality. The Interaction between Temporal and Atemporal Structure*. Cambridge Studies in Linguistics, Vol. 64. Cambridge: Cambridge University Press.

takezawa.koichi.gn@u.tsukuba.ac.jp